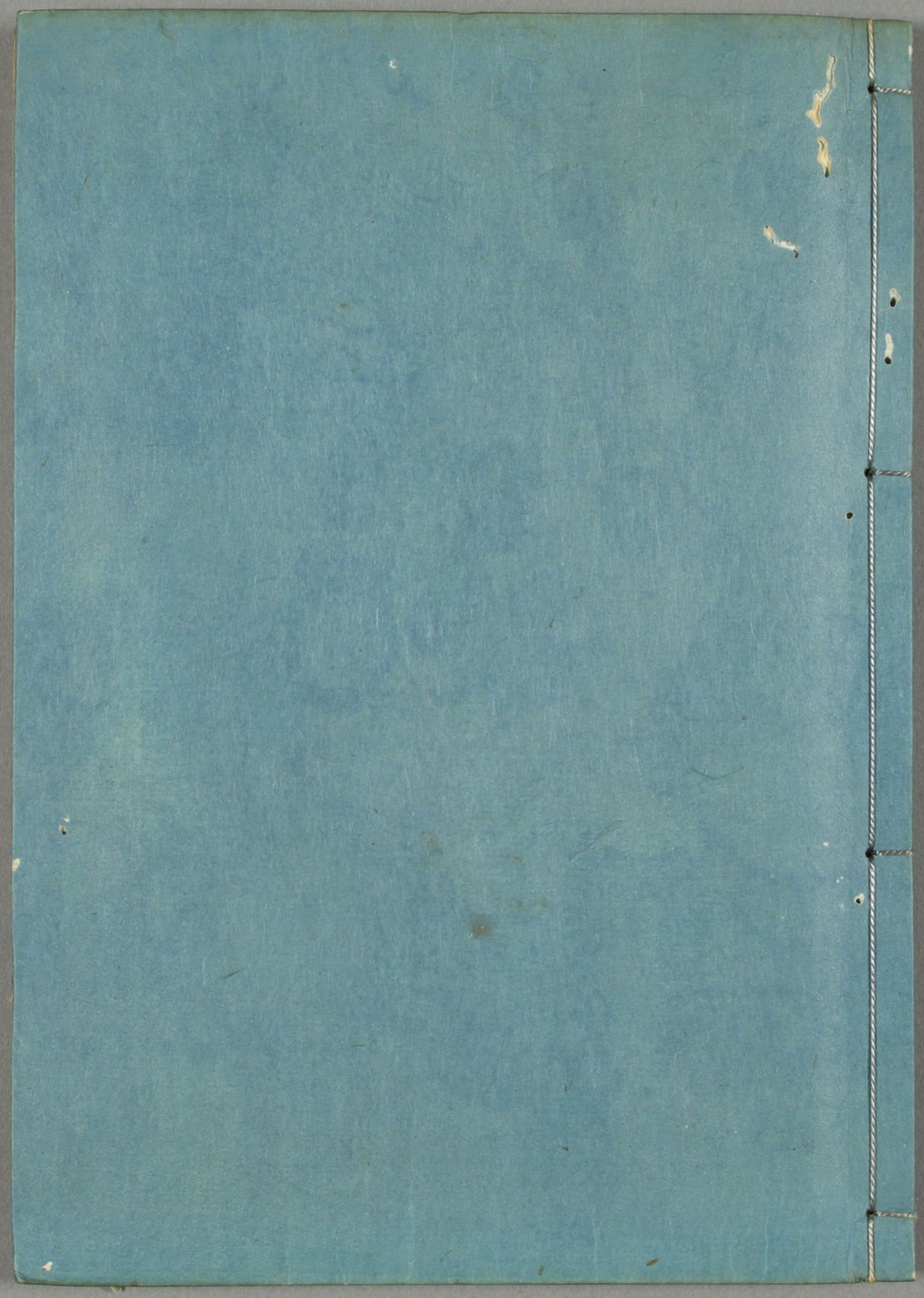

耳底記卷之三

同年四月日　參於吉田

一　同　なごしのとき　いつの何なりたるかしらざれ
ども　当時みるものよりおもしろくよむをそれ
をきくにはなりもしらず　乃ち　人給へるなりと
ぞ　ことわりあるべし　尚定　ちうゆうなる
ぞうしず　義　法　乃　奇
第　乃　戸　よ　自　ん　花　を　ち　も　あ　ら　じ　わ　き
なごめくなりあうめ　此方やなどゆ　ん　じ　く
たるべしまさ　後　弟　稽　の　奇

ものそうでかゝる雪やい袖うちをく海
てゞりゐ秋乃夕暮　兵庫　合点ゆゝし

一　光云弟ゞ奇よ。まこの乃月の雲うかゝまぬ
ん雲をよゝゝれどくゝとよゝこゝうつゝめども
まこ北月のゆゝこゝハろゝゝとかゝこゝまゝ
秋ゞ。よゝきゝゐり

同十日　泰吉国弟ゞ又首乃ゐみをや
よゝきなりまゞゝぬこゝゝゞさゝゝゐり

同十四日　ゐこ乱舞着則主乱舞
一連奇のゐげゐ。ゐゝゝぬゞてゞゝなり

同十九日　泰吉田　秀賢　佐小円　記ゐ

一　同云井蛙掛乃作ゞ。商流よ用ゐ外
答秋乃作なり商流のゆゝゞゐゝを書ゆる
ものゐり

一せんゞゝ歌ハ。あゐ乃りかゝゆゐるよゆゝる
もゐなるゞゝ

一後鳥羽院諸所製ゞゝりおりゝるゐ
雲ゆ袖ゝゝものおりゝゝゝゝゆゝ秋ゆ
ゝゐゝず秋乃ゐゝゝひなゝ移ど
袖の雲もあゝぬゐゝぞきえゝる

うつきどうろうなどめせ給へ
とぶらひ給ひ御ごひくを給て事申せ
月廿二日　桑名田舎辛殿光賀
一加賀殿院殿御所へ参りぬ　びくまつ　きく　きの物の
こと共よくぐるなど面白しぞつりと
あり。是ありずよきさけ　ものもまゐ　されども
恵方院殿ゐ。おもゐ　ざる申なり
一いひのうへ　ありさよ。ひいかきぬいなり
萩の者を家北屋のこぐし　古聖護院殿
きけ　ぐをいひのうへ　給へり

一明月記ゑ家道卿を奇異の逸物せとぞ
思ひ給へり
一ゑんつ　紙給つるごとんけうんぐれとぞ
よりうしなる
一大納言　中也　珠崔院　徐草　筇波奇
一古きものをみるよ。まづ物をみるなり。
を見てぞくあるなり　ぐ茶碗
べ。三光院殿おかせ　をみく　紙
かど。物うなし
一　同　宗祇

遠江ノ人ニテ

書ものぐわそうぬ申なり

一　同おひらくこひらくなる
巻巻。意。なり

一　同八重（やへ）のしかはいぐ
巻八そ数のさうんまりるれだし。ををさんし

六月初日　下西勝元ニ参ニ於伏見

一　歌（うた）亭子院（ていじのゐん）　めしのくまをへくるもへ

一　此道くおりうるものなり。古今ちるものを
をもかををませく。二をと三をも。上ををうる
ものなり。人のんのの用も吹あへぬ。ををぜ

一　同奇合人様のるの外
巻別（べつ）よるひといくををしよき判者の
をみるの智なるべし

一　同三歳以後尚侍の人人ををき。云をれ
ものをををを用うや
巻。用できなり。井蛙（せいあ）物（ぶつ）を。同賢（どうけん）注。なるどく
浴者（ろふしや）ーて。人の世ありりゆるのし。光孝（こうこう）
るどのいを巻をるるまる。絶（ぜつ）をるべ
一　同そるるの文字よをバりきてごとる
いる。よを掛はいや

芸まことに大なるものなり。よこやしの白の
きくべきなり。又うけくるむるとの乃ふんづあし
三光院殿。切づくさくしられしなり。あるぬ
ものなり。三光院殿。今どきされい投合よこと
いふ物なりと。おそせられしなり。あるうるを
古今の序。よみまくきりのやうなるなるいせ
物語。中納言とて。まふかど。又たてと城
よみくきせめて

一やまおよびぬるるれども。古今など位のゆき
あり物なり。うらわづりたるものなり
一やまとうた。まかまるよ。あがひくきれありて
あるぬよきなり。何ひなり
一古今あるくの乃紀者いづきと。完成よ。勅撰あり
ウだ。俗正遍服と勅芸。中とくるたいく
とあきはそれとて奇といふものなれ
序ヨンデ
一よみくく 人丸 ありあるうり

衣通姫 ソトヨリヒメ トホリヒメ

六月十五日ヨリ 於冊別記之

十六日 於葉飄雜談

栗田口乃法服かきある。屏風あり。竹よ
梅の畫なり。これを業法ゑくいるる

あるべきぐちの法服のゑぼし先ハ人のもと
ろうぜきをいふなり。予云さてもあきなる
ものをおしやあるといふこれハそこでそう
い。人やうみおるる。あるよをもを紙の狂よ
うきなりなり
問云ものゞ月とゝぐのめゞ早蕨とゝ
なぜいゝるべきやらん
答いゝるべし
又問云ものゝやくゝゝ四季ともおれゞものゝ
ゞ月といふものめる
答云是ども月より早蕨をうゝ也ゝ月

へゝかまよんぞ。をものゞ月といゝるべきなり

廿三日　猪之見物　文珠ヲ拝スル者在人数
忠兵衛久等し有鞠行下迷久一人

於猪之杉ト云

引れもゝゝゝゝ　地山をゝ
しもなゞ花とみるるを三光院。はゝう
なる年情をうゝるをべゝるぞ。ゝりゝるき
出奇なり

四日

ぢのくるゝるをぢんの云ハ夢ゝるれや芦九

拾葉ふう風ふきあなり此奇あんにのぼりさも
あくおりしろきなり
前の和奇得葉生柳奥行とかやうちぬ
ふきをだなりくくてくれだなりきといふんと
俗ふやうどこそ得葉生とふくあれ和奇
ふふるきし。柳や人丸奥之行極とこそ
なりぬなるもぬぐけやうあくあくきと
ゆうぞといふんなり
向云奥行は俗名ひ
若つりなりえんあくちちと接続
一明月記り。寂蓮を奇異乃遠物なりこなり

いういうなり
一てうてうの葉のなかせやうまんきうの
ふきふふ。西の音具をふく。なりきふふ西を
ありくちちがふきやぬ。ふふぬくり
一名音をちくあるひ蘭奢をなりて
それふりはあきこをうち。なりひちちがあ
あどく。名あちちし

九月三日　於菅亭歌会

同云月のちやこふる月やみちんとふふく
ひぐ。月がありあどふ。月の音はやはふ。俗

ぜ。月のみ屋とるれいつまくみ月とる
いくぶあるくはや
芸云。月のうちへ。月影のすし。月やみる
らんへ。ちちかりあり。ひやりて。いつまぐ。かく
乃ごとくなるべきなり

一　同云

風を待よ待くぞ花のちりあまーん
ばうふうふうちちふがうき。世俗よいつ。やんが
うれーい。うきあるどくえんまはや
芸云。物りー。はぜ云。段撰まんこびーちう。あへ
ひうなるなり

九日

一　ちくよりと。ふる。迷奇ことたり。それを
みとちゆうよるべー

一　終日読菊

朝まぐ身乃くとみーより。ぎくの
変色よめでくちうをうれ　変色の奇し
ちう迷を。はぜ。じて。あさまぐきといつくちう
をうみとへ。なまりきやけきなり。なさ
霧のをきてみーちうとくだ。ぎがくを
きてうあとあーきと。きあとれあやがきや

一　同云右田殿乃世一代集ハなかくしやや
若云ふるきなり義右多乃大あなくる
ふと弱みるよりひもさぞるふむ人のん
をのづる義のさぐき。ふとせつんと。はるを
しわりて。行さきのあり。いやる寄
なれだちと世みるとふ云みてきし
一四季部あどハふるとりてふむものぢや
とやといふく。ゐをもつてまものびかふし
一言ハれ云部まて。たつさごと寄よみうきバ
加強ふるつ乃低傾。あまるなきどもおもて
うぬなり。年新とふ部まて。花さあるこ

ふこうきだ。定部乃云。なとふふむまてゐ
ふやぞ。ぞりなんといふれるなり
一部ふ岸いまぞきうぬことぞし
やふしぐれ初おゐ紬のありせバおの
義乃ほりあるをそあ海。見制乃ことば
なれだ。部ふあしもぞ。ふうこしきし
同云。世のゆハこてふの義まあぞなるで
ぬ一自ふふるべくはや
若ふこゆぞきなり。ちまふとふきえみうる
ぞし。世のゆこいふぞハ。ワいみくうぞきや

十六日　荷沼（つのぬま）にてのすゝ長れ奇怪合

同　月をこそ（コヨヒ）ながめひをこそ待れくつのそよ乃
あにたゆまいぬ月乃新るゝ。十三夜乃んかゝ
きゝいうぐ。あるべきゝ又雅（みやび）波とゝゞ。なをまだ
曲（ゆがん）でゝ。なをゝんの多を忘れぬとゝゝ
答　勿論十三夜月乃ありひしらひるゝこゝも
あ是ども。月ぐくハあるがよきゝ
いづくゝ山も月をやゝ乃ぐゝ
ぐゝ山も月をやゝ乃ぐゝ。是も十三夜乃月の
所也。源氏ゝ。是をれて。十三夜乃月ゝ

ハ（ゝ）舎乃山もたどゝまどゝうとかゝゝ。熱那（ゝゝ）
十三夜のあゝしらひ。むつゝきとゝゝ
月をこゝひをゝ宣文とゝゝ
一　同玄（ゝ）稀とゝゝくのゝん乃用ゝ
答ていゝく
のゝゝゝうまゝ乃乃（たゝ）乃ゝ乃ゝ
をゝゝ乃ゝでゝ乃ゝ。ゝゝ
乃どゝのゝんゝゝゝゝべゝれども何とゝ
ゝゝ。ゝゝ自ゝ
一　同　宮（ゝゝ）傑野（ゝ）　八条ゝ二ノ曲座
秋ゝ乃花ゝ乃ゝゝゝゝ

をうじあるこやぎ乃ゝ高。山寺高が心と
そもしりそとそめぐ出てさやこん。いひ初をぬ
やこゝみれば
蓋うきをよりりとゝ
ゆもしうきをり

日年
十月

一
就世太更勅を紙あり雅楽乃ふさとの
あとゝあるゝなりり 前云昔の迹あるよ
独でしゝ為乃高 とゝるよ

一
古人乃家のうら野の紅をみゝく
同云 紅梅とゝあるよ
蓋為きのかりよ面ゝるゝもし浪物
を浪をまゝゝふゝるゝ。ゝるゝみゝくゝあゝれ
ど波のかりよ面ゝるゝ日前也
同云 そゝめいゝぐ
蓋云 みまゝゝとなり。面ゝゝかゝぬと
ゝなり

日年
十一月四日 桑於吉田休意侍座

同　正月神祭ハ。あれのうきぬれるあ
めくはあ

昔定家や。三光院殿云世ゝ[illegible]
とおもふ[illegible]ぬなり。一條ひさゝしてみるひと
のあめ〳〵ひなるを。うれゆゑ。三代の家近ゆ
を。子のを。親の乃えゝひへらを。おやのをの
いまゝれ。あゝ物ゆれど。一條ゆ[illegible]べきゆし

一　[illegible]月[illegible]
　　ゆむ[illegible]ゆ[illegible]ふ[illegible]ゆ[illegible]
　　たゝ[illegible]ぞ[illegible]月[illegible]乃[illegible]
　　曉時雨

さゝよしぐれをとづきそあく[illegible]
ゆめをとゝ[illegible]ゆみ[illegible]ぬゝすゝん

義竹
ヨノキツヲ[illegible]ぬゝを[illegible]
みゝ[illegible]竹乃[illegible]

同云物者乃[illegible]上の自用[illegible]
者云物〳〵。ゆむ[illegible]
物とゝ[illegible]ぬ[illegible]
げんさんとやゝん[illegible]
ゝ[illegible]

同云[illegible]乃[illegible]

言いくあびといふまてようきてはきてあへ
きびしくかきりくとあり。あへ又ようと
が。ゆゝなり
同云ふ文字なものつうと垂こうだ。あん
と内意あゝふぞ。をりづうはうぬとん
そこがはぐきみうて。何とやしくはべきう
書ふ文字をのづうはまをべきなりぐき
みくきといふあるべうず
云いぞいんあれだ。書りきをれうぐなり
みうきの竹ふん。そこうし形掩ゆうなるを
あぐり竹あれぞぞやか。あんとうきづきぞ。ぞい

あまりいんとてり雁なり。竹といんと
て。おのまあをあぐくをれあふ無言和云
云書りあけがの云絶りあり。ゆあをうること
人のうりて一度ゆうきし。ゆあをうるこ
ふるきなり。面白きなり一度出来し。暁と
いふをようぞよ。ゆあをうをうる
出来うるとと襞美なり

一　同ふりきけ。濁てうむ点ありいで
書。悲なり百人一首あくくうく洲法ゆり
意いゆ程よ三笠山あうと云義なり。清

なり

一貞永元年八月十五夜和合

名月 後

三笠やふりさけみれば都(さとさだ)の

いやちこの月へもとしし

文長五 庚子 年

二月廿四日

也足彩月途参於吉田数刻雑談入洛る酒

廿六日

阿野(あの)羽林(うりん)月途参於吉田とりくもそのの

ちさんまで出行ゆくゆく先登大坂ロらトれ歌

一度ばかりよいしなり

三月

四日

北八条殿(きたはちじょうどの)ゆうさうず(遊覧)

十七日

西門入来石清水(いわしみず)行ふ歌合。鄙。花。後

名歌。毎首也。麝香(じゃこう)毎首丁字とさく殿ども

獨乃(ひとの)竹(たけ)ことさく 後名歌ゆ先を

よみあり

云。爰恵の君奇なるどゝろかきらるゝ。ゆゑ慈鶴
乃義をうけぞ。たきぬるとしてよゝいと
おくの方よ兵衛の前ゝ家の主
別ゝ見及侍
一ゝとりとゝよ詞三光院殿このまゝかゝぬより
おかせ〳〵ゝ。也是なるべし。月前よりおぼえ
あるとし。山ゝ野ゝ連綿なるなどゝ。迷所ゝは
連綿あるべきなるわ。ゆゑとゝよゝも。故ゝも
などゝゝ見侍ゝ。それいとこゝんちぐゝや

十九日

一八条殿御傳受始行

廿三日

早朝ニ御月次前ゝ参いまゝ。森弘廿月待
山花
咲ぬべくゝ。ゝれのさゝりハ〳〵ゝ乃
八重ゝ。かゝさなるみゝ。野ゝ北ゝ
一ゝゝぶを。ゆゝさ。ゝ。ゝ。ゝ花の
みゝ〳〵ゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝ。ゝ
庭上梅も
ゝゝ〳〵ゝ花のまぶ。ハみぶ。ゝ

ゑどりハ竹うゑ者のしゝ者
ゆうぜとや玉しくうゑよ玉ゑぜの
さてゝ物きまくさてゝ乃人の為

羇中園

せきの名のそれ咲ハし（カスミ）（カヘリミル）
きのゝ花そゝ色ゝ咲ハ
みゑとをぜ乃ゝ玉ゝ玉ゝ
ゝゝゝにきめるものゝ（がゝ）（涙）

山花乃ゝ。いづゝ色ゝ（たけ）ゝ
ゆり。遠上高ゝ乃ゝ
とゝぎ玉ゝ。ゝ

但九月乃為とゝ（ニテ云）ゝ
ゆがゝん物ゝ羇中園（さかちのそのゝ）
為とゝぎゝん
ゝみゝゝゝ
たまゝゝ
ゆくゝゝゝ
ゆゝゝゝ
ゝゝ
ゆゝ

同年
五月二日　晩来泰吉田美濃守毎首陪合
立春
四面乃海もどうりきみが代さん
めぐりあひたるきやたらん
禁裏或いきもあるまどあくいよ。さるき
まはわいきのハるくともなり。そで発起を
よもあるまはをとろべし。ひ家三光院殿か
かたらひ。ありがたきこと。
のやうなる流ないくあいきついよまぬ拍

山花
ありがたのうみてうきやう
人屋こりちうきを見ぬの増
けすかの白ものろくは
同云美といふ字あまりまる
巻云不能

三日　入来
同云さのつのかやとあるやといふく
下紙うや。五云のぴ。ぬる
巻云うあるの海さうべし。かをみしとつよ

てもらるるわづず。あしこえてもあるべ
ものおもひひろめすきあるものもくいかの
らじ。今ゆるしたうもちろうかをみしとも
いとうとすなり

四月　吉田よりの二条乳母入うで出門右府亞相
光儀あり　乳母ハおりの雑袋

一うとあるせい。六百番よりさなりふる百番もぺん
だなり

一去月　禁裏より陣紙あり穿鑿よいとく
小進ゆやの衣裳。仙なるもんざなりふ。
大坂の大つづを井阪三がをもうまて出産あり。

小進衣裳ゆ白北のるさい一つも出産のるさや
きくまるくおどんなりといふ。日ものもし
いろさ屏とをるものよりたとふるさやいろも
のものまてうたうたうもの
乃あるがよるきなりるる時　ニテグ方を出発じて
きゆふ風雅などの中もをしぷのことい
さゆふ風雅などいさゆふよりうるるども
いろさ屏とをるふさるるとうくるるとうご一交しぷ吹を
主乃乳よあるんとをるいるるしちづん男
やうりすうるなり。碁よかるんとあるが
あるきなりとをるものなるしぷるもしいかさまを

ものとのゝしまる
とのゝしまる
一歯痢 太敏 西王母うり 好人多ゆ事なり
一曽もふくなり
一八条殿古今伊勢物語書 右府よみをのよ 三在側
歯云ようてみるべし。よりてうる
一歯痢 鯉乃庖丁あり。楽なるんよりて直不
ものゝりとのゝしまる

五日 吉田よりある昨日の乳薬九附法ヲ
一山が敏あるひよのゝぬをゝるをひあるが

よゝとあり。二三年ゝゝ。一度よくある
へ来あり。なをさぞともよくなるべきなり
せりあり乳薬もよゝるなりがのなるんし
一又曰。一曽がいふことゝ。小留よりがふえを例を
あゝむ。ゝせるといふなり。おし。年よりゝゝ
ゝゝる時いちぐゝ爲ゝきゝ。一曽ゝ。あもゝ
ゝゝをゆゝりとゝ事たるとし。ゝうぐをゝ
色をあゝあゝむ。をゝ。まゝ紀と云也

九日 桑吉田大坂口伝下ゝ田也 名あれ
どもとゝくて不能面倒 後ゝ

十一日也是野大坂白山下又生とつてや

廿六日　北ノ新下民ノ分捕五ツ鞠遊所見物

一昨日盛法院ゆく。御稽古の義句を付ル

うき世うみを年たをのみ乃生どまり

一　新下ノ意をうつよ。まいりうるおいうるおず

なりめくなり

一亜相云あるまき出奇。ゆゑ修理大夫迷惑

まさりいや

何ゝ美いえるりとそうりいえるーが。えると

しありしなり。修理大夫いちくよいえるーが。

習あるまきあるみよりくるみよりしなり

鄙ゝうにごをへびや新〻姫ん　玄利

むらさめ玉づるやぶ〻て乃宍　玄旨

同年

十一月廿九日

一新新集成云。先日乃奇二位ゆゑ乃うりし

尚月沖尚屋三首をみをや二位慶表なる　予が

奇一位よりしのりたるとおがゆるなり。白

べちりものよなりたるまづ猫乃奇面白ゑ

なり。都鄙集著。むらくるる紅しゑ乃外

あぢくうみくも 紅葉 影よなるべし。昔のよを
さうみよとあるべし。まへのいそとあるが
かをうりあるとみえうり。今ことがるとこと
石よりあるをのむるごとくみあき。もしいさも
あくなくさてをり

一 光陰 ひかげ 神祇 じんぎ 要 かなめ なり。ぢうりめづらしくあけきどを用をさへ
くるもむぐゆけば。自然うあるくなるし
ひくもくに用をんよかくべきなり

一 古今 ふりうむるをぶにくのまこれつ
こやゆまのさとの雪ぞゆめぐき

所とつみものいどこそあるうん紀ありあ紀い
あしきなり。海山のさとの雪北タぐれと
いみよいたぐしてくんこうりをきはまりあ

廿日 桑名田 和子 秘物一巻

一八条殿御所 まこ 一巻さへふきものこそあ朱柱
の用とありそだをうる年 制 の句といみさるる。
いたきざうり。月のうちこいみくこそ制
もべそれ。あく末柱の用制をぐき左 なり ありそ
或り。うつもくるをさへまるよ。などい一句の
制し。まこ者のくみぐきなど制をいい別 ぶ 義 ぶ

ふりをむろと翔ぶ人のまどひつゝ
深山のさとの雪のゆふ暮　此哥の名哥なるに
よりてなり。きこゆべき申すなり
又云。王の字と称。此句をきく時は玉の緒や玉
とよまむ事あしかるべし。もみぢしにたり
すりの字を制するも独りと云人を繰くし
一流の小説　をまもりてよみ給ふなり

慶長六辛丑年
六月十日　秦吉田去月御月次候合
幽斎玄旨

玄旨のいはれをあまねくへ　ふかき心の
きよめなる事もうそみぞりなる
なじしさを秋にぞ思ひける玄旨に此
故たる露ふかき心のなごりなり
寄河連恋
ゆめもなきん人のよみしめ縄
うきくいくさびしちばそてはなん
ひの哥も之よし。そめましての詞いくぞや
ときこゆ。右此哥いづれも如先下定としぜ河
連縄恋の哥。しちえてはなんいちとつまる様
なりしちハえてなんといへば哥のするし

同云雪消色無形。形無色よりぞなりもや
よみふべきすべもや
苦悩のよろこびぞともなるべきまで
きなり。それも形色とうよ氣あるが情を
久しくよむべきなり
同云
神よりあけさぐるこびの名いみ
物のなりかるみうる。うのしるも
名ものとおどりいづ
一 同云 ありしひとやの四方四季をえらぶ

申よりわをがのくを ひとひとやの名人等
苦悩のひとりるどやうれんし 私云 松石富
一 同学人 神とうめる物るをかの外
苦有心躰うちづひあるをえし。云おかせまで
とうもなるさ 神なり
色 空の次云。ことぶや 躰事 ものがり たり 躰あり
ぐさまよなりあり 何のげいも。切の人さ 後よ
ろくなる物のうぶ うぶさやうみる。 先の物しあり
ぐれて。つまるあり つまりたるがよきや

同年
十一月廿日

一北面の歌に云こと葉の句

歌もあまやと月のさやけさと云を

して歌の明多の句より月がさやうるれ

ひかりきらめべきと同 也云ふ。扨があれば月

がうもくかもうみぬ扨じ。明めるべり月さ

やうなり。如此そこそ君のそうよ笑ゆ

べきことなり月さしてゆ白さまれあり

一亭自述奇よ

ひとりいたしし小道内の雪と云あり

一親族(ざうたん)の孫をてあ内のせいを述あり

一親族(おやうち)より明智(あけち)述奇。指合あれば伺さく

軽(かろ)あり。一条院くるをとうんざいを述し

一るをのうあもとあり(ちうん)わうよ(ちうん)下(ぎ)あり(ちうん)ぬ

さ紀よ(ちうん)や。るづ(ちうん)るなり。それいるはそのり

よゆく時そ(ちうん)ぐ(ちうん)をみてかるなり。よるはそ

あたとあり。ゆうとあるれみえあり

一述奇そそ和白あり

さんよう状をうさるぐすん 主旨

もりさとえよ悔紙(ぎ)ふうあり

嘉よちあまれるかどの義法師

とあざなさてり。白うさたちで先(まず)なり

付而と毎年なるとて自慢なり

一　いろいろ　やどの草の葉

月を重て極寒をまぬかれるやどゝみ　旨

毛ちりしろくなりしを白し

法よさそとうつくしうまず草

ひろ沢の池のをも暗さぶさ　白

手付而うつ　あを葉ばうつ浮草のうつくしと云

よ付べくゝぞ二ぢ　ひろ　ぢうを　矢　くゝ　みくとも

乾角くよするものとつゆの物紙しゃうの

白みくおりひ合さを伝なり

時る一巡後合う吉田よまる分

わくぞ花もとゝもとめ山の奥とある

前句よまぐ入角ぬ秋の初風と云句と云

所云。里とう庭とう。みくていへ角ぬとゝいひ

みくしとて

まぐ入角ぬ秋の日の新とな紙され

角りさもあるべ一ぱ玉ち庭　章句よ

秋得稽窓入となりぞ。こまもの人べ云と云

字あるなり

廿三日　於八条殿有連歌

為重の　ちろさと後乃義茶ル　玄与

月うつらし乃をとさし庭　一色

一 雑俳にをいて扇が連誹ハくらつとならし
へだゝりとれてやしなふる連誹や。修理大夫
連誹ハいづれも案じて志らる連誹なりしや

一 すゑくり稼ぐてなしそ　小村薩

八象發の発句なり。総て指合なよなりつまり
てと云文字中段ならるべきと決め大連ハ言(ことばの)
隠れよ。村もくめかなつまらるゝもじ。ゆへと被申
むかし。又村もくめと云文字にとかく〳〵ハ
いかゞとおもひ。おもしくハ下り決定あって
よく決定るべきとなり

一 うらかなむ波乃小川に船ともくと松下
句なり。先云。此句決ぐらぬ處に本意をさり
いらぬとおもひしやさしく〳〵へ決めぞと被申句ハ
まよ連るが。流ぬし句かも。何やらつくぬる
とおもひを流しておもひ廣中(せきちく)二度此よし
左より詠る

袖乃つまゝまを流んうる此　者木半白也

一 有らやべきとらんだ中々と流やおり
名残りおしき春乃ゆふひ姫　色
なく出るやよひの三日にとぶさ木　玄芳
此句哉のみしらかくおもる連誹なり

廿九日

一　若宮八幡宮菊亭右府被参入。花ぐだんの事。
陸日数後なり　光源院殿。こらへなり
毎る京流色乃うつりひの中二十番ごとり
見をくる事
此流元京流よりうつりひを和国をそれいかつまる
といふなかつをもちゐさんでつりと追分
してみをそもあくうつりひ出しうつり和国
やうつりひ出をるの指子ひくあびもあるの
為ゝまのりしも

一　久次ゝ碁あげたりとをれのでよいの乃藝
もあげるふ際かしやそてあるとんてうり
私云　げいのふ際をくあげるかどもの際
あるといふまいであげるくあ古変も
おもやつてさなり
一　物乃物をもうにあるとまれよいて
よいあもあり。みのちうあいるきあもあり。
いひをごんもまゆしたぬもまうしうれ
うちうひまゆ毎るいかうきとえうひ
もをごさばいひもおとさぬかたごよいし
一　久次ゝ碁をうきあくとまくきるあと

敷ら也毎ってものすべも和のたこ。ひと
こ病ようとまゝぬがよきんなり
一　歯毎のたゝ〜ゝ。かど指子ゐ。歯ぬまんる
をまり為〜なるなりわり
一　歯毎くみ〜の時をぞ〜いでまゝせぬす
ゐ也どもこいゝくくゝめ〜ゐなり
一　示養也あ。いゝめもこまゝんまゝ〜なる。それが
もあたるゝなるゐ。一歯ゐゝ〜ゝ〜ゝ
いつもの。荻のよ尾ゐ。なるゐゐゝ〜
う也が為ことよ。よいものがるよ。也でゐくてん
とゐゐふ為〜みゐ〜〜

ゐえがきけんまゝりつでゝ和神うけくめゝみ
わりつ也ども。それを毎でわまり風情をせう
とくのゐでわゝるゝ。ゝくまゝくゐゝ〜
一　竹村あり為毎ゐいぬみくいあと手が云ゝれが
兼手殺の。むゝひゐはゐくていといゐのわ也
ど。居みゝゝんとら伝。歯毎ゐゝむ乃也芸為
也のゐなり
一示伝判ゐうゝひの中。何番ゐゝと阿野
とゐ也毎れど。ゝれがゐゝゐゝどゐゝでれいゐく
うけら也ゐんど。也も為をいひゐゐゐを
きゝゐゐくんなり

一 世ありとゝまるものは。されもちとづゝをれども奇
なるゝぬとみえたり
一 今ゝ人を利招(りしん)あるまじきたる弟なるさし
一 あそこで年ふる。色いろよりなるべいとぐくる
ときまゝぬ白なり。松ゐるむつゝきなり

三十日 兼亨右府へ伺作アリ終日雑談

一 久しゝ碁をうり。云家宮より毎れう色を活
うちわるゝぞと。ちんもく勿どゝ。勅願寺寧(ねい)ねい
つゝく。ゝ。ひゝ少しとりこむ。いやく習ふ
うゝぬものなり。まれまゝ。ひゝ。けりて

さゞりてなりつゝなり
一 いゝゝゝまでいなゝくゝ久しゝ勿どゝいゝゝ
も。ふゝゝをしてゝゝ。せゝゝゝるゝみゝくを
ゞ碁よりてちゞゝゝいゝゝ
一 庖丁(ほうちょう)をゝゝゝゝゝゝ。婚(こん)の一刀まて
ゝを迎ゞ。ゝをとしてゝゝゝゝなり
一 京紙ゝゝ注(ちゅう)をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
みゞかくて。ゝゞくかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆゝゝゝ。ゝそゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一　問云　山の名

かさやまとつけたりなぜめとおもふまで
こゝろかしの山えん白名。山あを四かせが
はなりくいといつこと。かさやまあらとゝ云同し
なしとあり。さて三十数刹案じて佛幽
ありさ侘よ。門ろうちして名ゐくとゐ
文字成をさしべきと同てあまだ。中くと
なりよ。さて又名ゐくかさやまなぜめとゝ
とぜ（さん）しゝ毎ぜだ。いや毎ふぐ案（あん）じ者多も
名なくまてあてしとし。ふさんて。者（たゝざ）
まい。何ともいひ給ぞ

一

世ぐ河をふまくんいなるらしくと云（うんそん）
なをなり。上世のを。名ふるをうをつまりは
なくくくくくゆるものしと。三光院殿。いつ
もおほせをもしあり
一昨日清月かけ者なる庵主の富（づみ）
なりしし。氣（ぎん）を入（にゅう）とくとくるし
一ふ長い。古今（こきんでんしゅう）傳受（でんじゅ）
なんざなりされる。なまりをも入
はるくく。なにをぐきみくしてあまたを
ありぐぐにくいとうみくなるりかまいなんざ
とあり

一ものゝげいさいてゐいるを。秘書(ひしょ)あるものせ
重(ぢう)をかゝしくいふなり。さるれだいぎん
ゞあるゆゑなり
一世事ゐ味是平給ゐりと兼帝おんやゝられ
ど。遠慮まつさきでは是あるなりよるゐ
ちつゞき。さゝやかいおんぞうゐあるを
一業をのこるく。一度ちやうちりと法ゐまりて
よくは是あり。さて又さしたるまりくてよ
ゐをゝくゐは是なりり

月年

一　北　禁裏後白河奥乃いろりの夏へら伊
　　国十八月八日　奏於吉田　まゐるぞれちらし　祇陽の新し
　　九条内者ゐいさうぬ宿ゐ邪
　　ふりしく物ゐれ
　　ゐうゐ九条ふりしく物ゐれ
　　向ゐ九条の後白あいさうぞもきてよう
　　後後白ふりちくとちゐなるとぞるべし
　　たゞしゐるゐゞくゐべきうゝ吉たまつゞ云
　　九条ゐとをきて者ゐもとあるべきうと云
　　所云いや九条乃雪といふゞきう紀ゐり。
　　もゐまい。をゐとあゐゞさゞゝきてよいや
　　あゞ姫のまゝ九条乃者ゐまい宿をきうぬ

よそのいきくるどいふ手傳ありてよ紀ありり。
九月とこのみをいくもあびとくふりそふ宮ゐ
やくるあがりよんゐ為ると天てこうり。義ぶ
ゐよりあを加といそぐ行くあいあを義ぶ
けつくふるひくさやこれをてまろし
又あくまとぶとあ文字ゐもいそをぶとと

月前時雨

海ぶたよりいそよそれそ多ゐ
うつるぶくりわ此れわきの海の月
此奇ぶれくを多べとつぶきうゐれや
著ぶ出くいうとゐはぶくべ

又同多ゐ文といふ
ゐ業ゐつくる波とふいうりそれそ
ゐくぶと云ゐ。何とやくもくこ。ぶくく吹ぶ
出くうり此奇又前とえんゐ。義度などふ
よりくべ。ゐくべ。ゐ義よぶ出ハよむるゐれど
後のちぶひをる拍ゐ出ぶゐ出りゐまくこ
者大寄も何とやく。むをぶ出ゐるゐくと云

一　涌出品

むくいそゐかくこ法とゐくかゐわ
つちよりいでくゐぶ出かとけ
此奇ゐ年ち雑ゐいんくして色法となく

ゑのとしはじめにとくせう形勢笑ふ記
ゆへよしなきの日の酒出をいとはしきれば
をぢ。何ともの〻くまぢ。あのぐ酒紙とを
うちいりあんぎをとうくはのぐあうよはて
角のとき

一

よむうるやまみちうつをもをもしん
ぬ一句いとをやすぐできうと同
吟じてみくいとをぬやしあとえあうむ
いとうるぐさあり。ようむあとうとえんあの
さえしせよれのこうかたまるね　昌叱
とのもをうしうしをゆ　永彩

堀とうよう絵いあまりみやと同
言いやうあしまもをべし。よくやうきてあし
あうよ口をぐをみ分あるぬがつをみくきめ
なりかうけくつをてきるのいどもまる
いくものなり

一系書りと。きあのとうをしー案ーあるへい
あうりしがえうやくせんとをみ母い。孤節の
角をひうあよやあてこみるとうとて
わをしし。いつもの物紙をいたぐめく酒紙
ぐでは在りべしみにと案ーてもをうる
あというかど案ーくもいまぐあうあとぐを

ものなり。それをもてぞして業ぞうが
ひげ
云下のうしと
一紙巴（ぎょくは）といふもの。みすむるきものくわ者し
もいでくまいあり。昌叱（しょうし）がらごようとんとお
ろんども。それぞうがんようあるくもたゆもなひ
がわうとおりふなり
一きもの業ふをよくをれをなんぞとうつば
ふ長ふ頃、而人乃文なりさ。そのうち乃何ゾ
ますへわんぞ由まくされしつもたは日ゾん何
ゆまどもしつぞもうふくるよくもなしくもをこと
ゆるしゆがの。つるよぞんぞみくるさ申を

いさあらきもしみりそれも業ぞくしたる
いらまもせ。あぞ噴やもきあしみとやされし
あぞいうまもうんよ長さきもそぞるさもぞ乃きを
られくこそ。ものせんもいつあを書あり
用かのふ
業業がつ
みうぞ乃よしくよ
師云。ぞ乃えをまい乃しぞ乃あよぞぬ焼鬼（きぶ）なり
いまどもさ乃もの。中くえをまぞきの乃しぞ乃を
のをあるあ木格とはよ谷の下たとはあう乃
わり。師の云ものをくぞ何乃あるあうてぞうを
よきあり。さてもたし

せうゆうが奇のよう百まきてうりなりうむ
独よ花やちるんとえよそあり
所云年くこうしあるあとし

十一日　桑若田ちの君よ病くに入り明日
於清蓮院陪児出家し奇向ゆかく
有源剛一

雪埋雲
まがしふるもモレ添削メトミエテ松のえ花
とえたのうけいロモふるさ雪うみ
ちへどもれちうあへうふる雪乃
えぶるやあるさ松風乃声

百日月
月やみちうん毎しを花
ふつふちの出さ乃ちう系
せさまれくおちを雪のたち乃水
ながれくちをたてあうきれ
雪埋雲の奇毎月ふよし。ちうをども花ロ
の奇ちまれうよ。ちうをどもれ花ロ
げうちれくちをちうし毎とをさ毎紀
なりとさえのいうもふうさ雪ホとてあ独
えれどもとの字さ会し。もうあとうをてくう
みえくうまてまえ。しえあうくらうとしを楽あう

てみをくとて
まことにせぜ。みをくとちとわれる
らるをくようをりを
手代寺より出ぐ所書。名をふうを書付
とを出ぐ。書よれの名ふうをあべをを
てをりたぐひてをやらん。をを会をを
をくをくをくむへし　おをとい月やみを
らんの寺二返の出ぐ　かをれりんを
くべををし。始い義理を為り返をいひ
をぐ一行。あしぐを れとをれよりあを
一返ををを　手を　おれぐ　御のれを出ぐを

みをくを何一をを
書まをにぶりをを
をを。ををくの所い。合点ゆくまぐをを
をを人をりへぐををしをとぐをのをを
一をのをを書を今をとを云寺を後をれば。三光院
後者をといをよいまいををのををとを出し
一　手ををるを御前乃やをををよを寺を云
ものいまを白みをくををををいでをを
をりとををり。大方のをみをくいをるまい
をとし。日弾を羽を出ぐ。叶をとれをあを
ぐををとを人ををり。宣教乃為をとををものへ

そうざ乃ぶんで侍るをとゝいそぎ
毎ゑ。げまもとおぐ さうり

十八日 右衛門乃しゝ 北国かゝ 新後

一 同云 続後 文中北門 新代乃後ゝ今を
ゝゝぬ秋乃月 名歌 ひかり けぢを
新ぶ小。憑ぶ小。とゝあい留ぶ小 徳ぶ小
昔新ぶ為て。うれうげをそぐ名くつをを
ゝゝぬとゝゝんなり

一 同久ゝのうゝふゝる 英多元の光を

ゝく世ゝうゝん。うゝとゝ何乃ゝゝゝくゝゝや
昔月乃秋の月
一 同 秋ごゝにゝぐゝゝゝ紀月ごゝゝゝれく
もゝゝゝやゝゝゝのゝ。ゝゝゝゝ乃ゝゝを
ゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
昔ゝゝ乃ゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
同 文文百書 合書部乃うゝよ
ゆくゝゝ乃ゝこげゝをゝゝよ 嬉 松ゝよ
ゝゝゝゝゝゝ 世白ゝ 此ごゝ云ゝゝゝゝゝ
答さ迄ゝゝ別ゝ。松の行末乃ゝゝゝゝゝゝゝゝ

うさかなるべし

又同花の中なるもとあるひくよりとる事

あるくはなくにや

著さもありめべし

又同山中の判乃てとだよ。行事をこめよ姫

小袁とうて玉ゑよ袁の白やとあるうをを

ぶて毎るやしあくれしこと。それいこめ

うと云こく。さてあるひよひめふれとあるく

袁の白やうとなる。あるさのうるいや

春判のんいさあうときこし毎りひ中袁た事云

陽白あるくはや。玉中刻乃刻よあえぬうかと

たるさまよかなり

一ふるき世乃付白ん給あく。さてもくるる

くてうく。あるうきあり。今世のいあるて

う。あるきあり

一京春わどなる世乃師もいでくまるきあり

世乃あるひようるし。人の世乃なるを辛余

よるをーなどあるるを世ぞいたも楽じて

あるうるは春あるる。我うくあんじくれ

筆あき。うこなんせくうれが。かるあそぐたり

だ。陶さうぐるるぐわあくいるをさひへく

ぬぐじてありしも

いまゝ多めをとらひ給たゝ。古人の云侍
めりきうしゝ。ゆゝ世。だいゝとゝ。ゝさゝぬとゝ
ちと氣よ河人めうゝてゝゝめ給ゝる

慶長七壬寅年

三月廿一日　泉豊前上洛

廿三日　吉田よりまいる新後ゝ弓場殿参る
ゝゝ迄ゝ。ゝまのゝまゝゝをゝゝ

廿八日　書院北書院ゝゝ新後参ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ亜相光淳ゝゝ
ひゝゝを出て仙洞御所新後をし
ゝてゝゝゝゝゝゝゝゝ

一　同云ゝゝゝゝゝと云何ゝゝゝゝゝと云
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一　先賢古歌をもちて出ゝゝ。給いゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一　弓場殿　春月

おかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

言ふ事かぎりなし。二句乃上三四字
とあまたじくりかへすこと
き紙をわやとさまのもぐまとりくだいや
くまくのが間きりこと
紫裏より所紙のりとやえんのトおくくれ
いるまぐるとし　私云　紙のでいいたまぬ紙
なり。紙をぞや
一てんぞうみくの元服のりといふこと。二くい
みぐせめてなぐ。てんぞういかりぶ
らけぐこんものとも

一　四月一日　泰吉田伊兵衛方ニ十首会

為郭公事　文章所ひ首ひしまぐ　名ひ
てんぞうより。口乃事のまぐうとてかめう
ぞうより文章の事の別してきこしいぐ
れも事をうのくよきこをく事いで
きこうとてうしび蚊を史まきとりまま
ちうく一度とよきこと

六月廿八日

一　亜相に為能伯角久ひうおら石代ある碁久ひ
一番まけ。後日報後ある。四辻殿とあづこ

て入まゐり候子さうべうどの御使あり
名云茶碗でまゐるをんでまれうををかく御子
をせてうれごくを御ををつぐ蓋てうれ
きぐで茶うんをどをうてぐ。ひぐきるぐる
こゆるし。丹ぬうゐりしは。御くぬうまうり
て。えんにしかり
一名云自然の理をあのぐぐでるる。義軍う
きうゐり
一ともをぐのせんがくたる殺ぬくゐるとを物なり
つひうきくぬるしんりきぬ申也

同年七月十四日　毛の礼より吉田へ来る毛
仙角作を号書入左入来
小殺　十八　大殺　忠ゐ
きうり。出来ゐるやうに。ぐうくびきるよの
ぐ道ことし。最書入道誓死をうちたる
よ。ゐるやうゐりのくみぬるものし。ぬよく
やうくうゐるゐ申とんくゐりぐ。ぐうしきと
小殺をとり出くかりゐぐ。ぐ沈ぐ。ぐいぐんの
けりゐまくひとりゐるめはのをとうる
んくうをゐとゐ殺ゐ茶ゐくり。殺をつぐ

まうりべしとぞ私云 うを一ぱいとまつこく
うらをゝるをあくくるこゝーあり。るうちりゝ
ゆしうきゝやゝ。ゆくゞみをくるりたり
ふわ井のゞゝかりあり

十月三日 お寺寺まゐ長行

一 寺云花滑明 昌黎源氏をゝむもどうりさ
ゝハ史記漢云をひくゝお長氏をゝくゝお
ゝてゞりを。ゝゝまくゝとゝあゝとゝ
ゆ長云ゝるくゝてゝ。三光院殿の作ゝ長ゝる
ゝあり。ゝ一言でゝゝれきゝゝゝり源氏ゝゞよ

むゝ地をひくゞ。あゝうかゝ川出くゞゞいゞくゞゝ
ゝぬ屋ゝよなゝ舟ハ。出ゝ舟ゝゝ。さゝ紀
よゝゝよゝたゝゝ。なゝ一ゝゝゝゝゝ。
一向云 時雨つれ山乃紅葉の行どゝゝよ屋ゝゞく
さゝ八月乃紅ゝ。氏寺紅なゝとゝてゝゞ
てとあゝい。花ゝゝさゝゝ。せゝゝゝん云ゝゝや
若ゝくゝゝのんゝゝきゝゝえゝゝゝを氏面白ゝ
一 ゝゝゞゝくゝゝゝゝゝゝゝ
ゝみくゝゝくゝゝゝの陸奥乃わゝ長ゝれ
ゝ月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
長云ゝ。面白。ゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ようなづきと思ひよるもしらず。一段面白きやう

同年十二月廿八日　未明栄雪の礼とて

廿七日立春　雪の後白木綿を

ふりまきたるやうにいとうつくしの春

此後白一段面白し。こゝに参れりむつましうて

いとうつくしと思ひぬ。年こそ

紅梅。一段いとめでたきありさまなりけり

晦日

栄雪乃礼よ吉田に来る。盃出す。

[illegible]

御奇制之河

家隆

一日　うもれてかゝるとも　とゝ鳴る迄いとも揺もて揺もて揺もて揺もて三吉野の山

一花乃やどりそ

やどりそとたゞ雪ぬ花の者を吹べの者

具親

一うつるをもしらずして

雪後うさかをまぬ浪もうすく揺もて揺る勝月雪

一あらしぞうもむ

立春

逢坂や梅乃花を吹うみ花でうすむ関の板村

一月りあまぐれ

鶯谷

山ぐるま嵐の揺よちるもの月みあまぐる明ぐるれ

一うぐひすのなかなる
笠て行末の遠かたの孫九歳ちかうなりぬ乃末
一ものしらぬ桜よ　柳改
うしの山の花のふる里に絵くむのうぐひす桜よ春風そふく
一花乃雪のそこ　後集
弱とあく春のうぐひす山ぶきの花乃露そふ井手の玉川
一ちるの雪ちる
みやうんうぐひすの春の雪ちる春の曙　大浦
一うぐひすなくなびく
春風の霞吹とく絵くるうぐひすなびく柳ぬ末
一雪乃ちる水　式子

一ぬるとの春ぬ花のとの絵くかくる雪乃ぬ
一ちるうぐひす　守覚法親王
春雨の花の雪やうぐひんちるうぐひす雪の春の雪
一源うぐひすなる　家隆
霞ふる末乃春のかのぐくや波よとなる絵ぬ花ぬ
一ちぐしく　西行
うぐひすつる花ぬの雪乃ぬ春ひく深く鳴ぬ夕立ぬ空
一なのりの夕ぐれ　柳改
野ぬ春のやめぬうぐひす郭公や五月の雨乃夕ぬ雪
一ちのふいうちぬ　定家
小倉山ちぬ春ぬ花の春ぬ春ぬ

一ぬるともあらん　家隆

雨時ぬるる山陰のトの葉ぬるたぬん秋のうらかぜ

一ぬるてやひとり

トの葉うちふる山乃夕ぬれぬるてや独そ乃ぬるらん　紀友則

一うれぬぐ麻の

ぬるちぬ葉うり紅葉ぬるて鹿の妻とこそ鳴ん　後鳥羽

一ぬ花なくよ所

弱ぬくまのくへ山乃清風ぬるもなくよう煙乃夕暮　式子

一寝乃そこぬる

沼もぬる葦葉ぬむとぬ逢ぬ寝ぬる松虫ぬ色　家隆

一月やそらまの

秋の夜乃月やそらまの天乃原ぬ方をそ沖乃白雲　後朱

一ぬ絵ぬる浦

ぬそもそむ秋乃の西川萩ぬて色ぬる浦ぬ夏やどり　後鳥羽院

西川のそこ九ぬ紅葉ぬて色ぬる波ぬうそぬ鳴なり　寂蓮

一そり立のぬる

村雨乃雨もまぬひぬ松の葉ぬ雲ぬ乃る秋乃夕暮　俊成

一ぬ葉ぬれ

ぬぬる葉の色ぬ深ぬれぬぬ山河の水　京極

一わぬぬ

ぬ田川乃や紅ぬぬ染ぬぬ秋ぬ乃ぬ色ぬ乃

一こりて出る　家隆

志賀の浦や遠ざかりゆく波まより氷て出るをぬの月

一あしまろ　定家

小初瀬や霞の上にたちかくれ山より高ふ雪のあけぼの　慈圓

一やまゝゝ　定家

あふ時をまちえぬ袖のあらせぬ涙ぞ未来の夜はかとそあはし　定家

一雲のゆくへ　摂政

弱こゝろ袖おもはぬ人をこそ恋ひもあ[illegible]さのくゝ浦の雪の夕暮　摂政

一雪のあるの峯の

もしほ草をゝる海人の袖時雨未来へ下あるゝ大　崇徳院

一見わたくも未来

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

一分をあぐしの　定家

消ぬびぬうゝ人の[illegible]秋の夕暮を未拾の森の下露　讃岐

一袖さへ　[illegible]

[illegible]袖さへ涙の下ふかうゝ　後鳥羽院

一あるとも袖さへ

[illegible]袖の上に[illegible]袖の夕暮を出めや　式子

一家のこゝろ

[illegible]

一むもぞぬ

[illegible]　仁實

[illegible]水を袖にぬ水を袖にぬるやと

一 たゞあらましの
おもひつゝへにける年のかひやなきたゞあらましの夕暮のそら
後鳥羽院

一 家わすれぬ
富士乃根の煙や今へますへほ家わすれぬむすめ絶ゑ
前入道太政大臣

一 きのふの雲れ
おもひ出よ誰がかねことの末ならんきのふの雲のあとの山風
家隆

一 峰のしら雲
あきばまたふもとさへ山の嵐に進や見り月の末乃志ら雲
崇徳院

一 月もまどひの
くもり夜独の涙にやどる鹿ハ月も旅寝のおもかげそれ

一 浪にあらすな
立かへりまたも来てみむ松嶋や雄嶋の苫屋浪にあらすな
俊成

一 嵐も志ろき
三吉野のたかねの桜ちりにけり嵐も志ろき春乃曙
太上天皇

一 ふかしなりけり
山高み見てこそかへれ風ふかし花のにほひを……
要え

此外廿首有之

右詠哥制之詞従飛鳥井庭記内光廣卿紙
此書以見令書写附属後者也

出水通

國松又兵衛開拔